

この人

この時

東京大学大学院循環器内科助手から、8月16日

付で信大大学院臓器発生制御医学講座教授に就任した。「信大には新しいものを積極的に外に発信していこうという気風がある。さまざまな専門領域の先生と情報交換しながら、集学的に研究を展開したい」と話す。

専門は循環器病学と再生・発生医学。動脈硬化や血管炎など、血管を中心とする循環器疾患について、遺伝子改変マウスの樹立とその解析から、疾患のメカニズムや遺伝

子の病態生理学的な機能、そしてその臨床応用の方法をさぐっている。代表的な研究成果として、東大循環器内科の永井良三教授らの研究チームで発見した遺伝子「K

LF5/BTEB2」が動脈硬化や経皮的冠動脈形成術後の再狭窄で認められる心血

脈硬化を起こさなかったほか、がん細胞を移植しても血管が新生されず、細胞の増殖も抑制された。このことから、「K

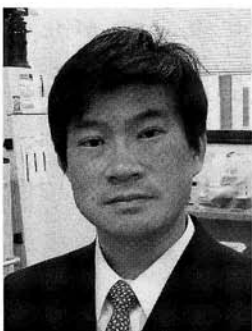
LF5/BTEB2」が動脈硬化や経皮的冠動脈形成術後の再狭窄で認められる心血

脈硬化を起こさなかったほか、がん細胞を移植しても血管が新生されず、細胞の増殖も抑制された。このことから、「K

作動性ペプチドのアドレノメデュリンが、従来知られていた血管拡張・降圧作用を持つだけでなく、血管新生・分化そのものキーファクターであることも明らかにした。動物を使って生体内反応を調べる手法は、循環

樹立には2年、その解析にはさらに2〜3年かかるというが「遺伝子の生理学的な役割や疾患との関わりが目に見える形で現れる。これは大きなアドバンテージ」と話す。同講座の池田宇一教授と同じ、循環器内科の臨床家。「臨床がベースだから、研究は物質ありきではなく、疾患ありき。疾患を理解することによって、生物学的な意味を知ることができる」。自らの研究を「疾患生命科学」と位置づける。

アドレノメデュリン自体を血管再生や動脈硬化治療に使うといった、臨床応用に向けての理論的根拠の詰めを進める。1966(昭和41)年東京都八王子市生まれ、38歳。98年東大大学院修了。眼科医の夫人と2人暮らし。趣味はレーモン・ルフエールなどのイージーリスニング鑑賞。特技は似顔絵で、研究室に出入りする企業の担当者や似顔絵にして憶える。



信大大学院臓器発生制御医学講座教授に就任した新藤隆行氏

「大地に根を張った再生医学」展開へ

LF5/BTEB2」が管リモデリングや臓器の線維化に関与することを突き止め、新たな治療法開発への道を拓いた。また、やはりノックアウトマウスを作ったところ、血管を傷ついても動

器領域では異色。しかしだからこそ、確かなエビデンスを持つこれらの研究成果は評価が高く、海外の学会からも注目を集める。遺伝子改変動物の

「再生・発生医学は10分期待できる分野だが、足場固めはこれから。根拠に支えられた展開が重要」。信大では、これまでの研究成果をもとに、

「再生・発生医学は10分期待できる分野だが、足場固めはこれから。根拠に支えられた展開が重要」。信大では、これまでの研究成果をもとに、

「再生・発生医学は10分期待できる分野だが、足場固めはこれから。根拠に支えられた展開が重要」。信大では、これまでの研究成果をもとに、